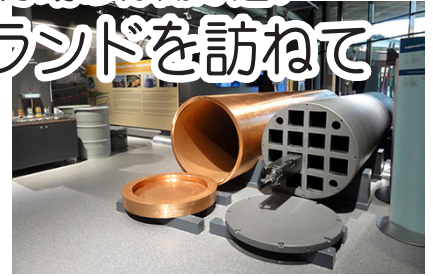




世界初の高レベル核廃棄物最終処分場の稼働が近い オンカロのあるフィンランドを訪ねて



昨秋、2020年代稼働を予定している世界初の高レベル核廃棄物最終処分場オンカロを見ようと、初めてフィンランドへ出かけた。オンカロは、首都ヘルシンキから北西へ約250キロの海辺に位置する。

オンカロへの道の両脇はごつごつした岩で、栄養分が薄いせいかわ樺などの細い木がところどころ生えて、木造の家屋がぼつぼつと建っている。ロマンチックともうら寂しいともいえる光景だが、ひょっこりとムーミンが出てきても不思議はない気がした。

フィンランドは日本とほぼ同じ面積の国土に550万人が住む。人口は日本の23分の1で、森林資源による木材や製紙、パルプを主幹産業とする。冷寒地で、冬は暗く長い。2017年時点で、電力は主に原子力(25%)、水力(17%)、バイオマス(13%)。

訪れたオンカロのインフォセンターに案内人はおらず、展示の品は説明文とビデオで詳細がわかるようになっていた。これまでの経緯や核廃棄物の処分方法についての説明文や映像があり、使用済み核燃料を納める模型(写真)もあってわかりやすい。ここまで情報をオープンにするのは、国民の理解を得ようという姿勢の表れだろう。

核廃棄物は2800個のキャニスター

容器に入れられ、さらに銅とコンクリートで覆って、地中400~450m地点で10万年間安全に保管されるという。いずれ地表の建物が消え、人類が死に絶え、氷河期がきてても…。

核廃棄物最終処分は、原発を保有する民間会社が責任を持つ。フィンランドの原発は2か所で、フォルトム社によるロヴィーサ原発(1、2号機)と、TVO社によるオルキオト原発(1、2号機)。当初は核廃棄物の国外処分を考えていたが、他国からの圧力もあり国内処分が必須となった。そのため両社は1995年にTVOが6割、フォルトム社が4割出資してポシヴァ社を設立し、最終処分に取り組むことになった。

1983年からTVO社は地質調査を始め、5ヶ所が候補に挙がっていた。原発を抱えるロヴィーサでは大きな反対運動が起こった一方、オルキオト原発を抱えるユーラヨキ自治体はこれを容認。ほとんどトラブルなく運営されていた原発と同じ技術者が関わるため、処分場にも信頼性があった。

処分場を誘致しようという自治体は他にもあったが、最終的にユーラヨキ自治体、すなわちオンカロに決定した。オンカロは、オルキオト原発から直線距離で2kmほどに位置する。

処分場から20kmほど離れたところにあるラウマ市の商工会議所の女性に話を聞いた。「現在の技術では、発電には原発が一番いいと思う。リスクはあるが政府や会社を信用している。正直言って原発は好きじゃないけど、お金と仕事を得るために原発を選んだのだから、核廃棄物も引き受けなければならない」と言う。大きな税収で医療施設や学校を建てることができ、地元の子供たちは学校の遠足で必ずインフォセンターを訪れるそうだ。

福島原発事故があったのに原発を推進?とたずねると「チェルノブイリ原発で事故があったのに、日本は原発を推進したでしょう。それにここは地震がないから大丈夫」とのこと。

フィンランドでは新たに1基を建設中であり、さらにもう1基が計画中だ。今回の旅で、ロシアをはさんでフィンランドと日本はお隣さんだと気づいた。原発は温暖化ガスを出さないし、他国に依存しないからいいという主張も、両国は同じである。いろいろ学んだフィンランド訪問だった。

ごみかんだドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録

3月にブレーメンのヤープンバザール(日本バザー)で福島について講演し、最後に関久雄さんの「たたり神」を私が日本語、明がドイツ語で1行ごとに朗読しました。前号のごみっと・SUNでこの詩を知り、ぜひドイツで紹介しなければと思ったのです。私が急ぎよ翻訳したのを、車の中で明が添削し(ドイツ語は明の方が上手)、朗読の練習をしました。

人前に出るの嫌だと言っていた明でしたが、本番では滞りなく朗読し「すごく緊張した、汗かいた」とのこと。みな真剣に聴いてくれ、すごく印象に残ったと言ってくれた人も。日本文化を紹介したバザーは1000人以上が訪れ大盛況で、売り上げ7000ユーロ(84万円)を福島の子供を支援する団体に寄付したそうです。明と私も微力ながらその一端を担うことができ、うれしい1日でした。

